

# 歩 & 目 デス 足 ラテス

Vol.76

## 近代化遺産・豊予をつなぐ 逓信省平磯水底線陸揚げ室

岡崎 直司

タウンツーリズム講座主宰・  
近代化遺産活用アドバイザー

佐田岬半島の西端エリアに、興味深い近代化遺産が二例、その遺構をとどめている。旧三崎町の瀬戸内側にある平磯水底線陸揚げ室と宇和海側の井野浦水底線陸揚げ室である。

前者は既に国の登録有形文化財に選定されているが、何れもその立地個所のこととあつて、未指定の後者と共にあまり知られていないと言いがたい。何よりも、一般的には“水底線陸揚げ室”などと言われても、それが一体ナンのことを指しているかと言葉なのかという初歩的な事でもまずはずまづくに違いない。スイティセン、つまりは海底ケーブルのことなのだとして推定するセンスが必要なのだが、戦後昭和24年に郵政省となる前身の逓信省が冠せられた名称から、何となく通信施設だと分かればその人は近代化遺産ツウということになる。スマホ全盛の今日、

有線の通信手段における事始めの物語、つまり“電話”を語るには、こうして字数が必要になるという次第。

平磯の建物は、小規模ながら昭和2年竣工の鉄筋コンクリート造で、地方におけるRC造としては結構早い段階と言える。それも官の建物だとしても、こんな人里離れた目に付かない場所に勿体ないようなレベルで出現した。海に面して花崗岩布積みの石垣でしっかりした地業を造成し、陸屋根にした機能優先の特殊施設。外観は、玄関入口の雨除け底をアーチ型に造形し、ベージュの磁器タイルで窓枠意匠とコラボ、スタッコ壁と相まつ



平磯水底線陸揚げ室全景

一方、井野浦にある水底線陸揚げ室の方は昭和18年の築。内部の梁部材に書かれた業者名は前上建設。前回の八幡浜劇場（同11年築）でも登場した前上圓太郎の手にかかる。実はもう一ヶ所、昭和25年に神崎（旧瀬戸町）にも設置されたらしいが、今は跡地となっている。これら



後方からの眺め



室内、戸棚の洋風持ち送り

て質感よく仕上げられている。小品ながらも、内部の建具に見られるアールデコの時代相から見ても、そのコンパクトなデザイン、平磯く志生木44・2kmを海底ケーブルでつなぎ、電話という文明の利器が地方社会に登場するために必要不可欠なインフラ整備としてのデビューでもあった。

平成23年調査時





井野浦水底線陸揚げ室

水底線の建物が三崎エリアに三ヶ所も設けられた理由は分からないが、他方しまたなみエリアにおいても東風浜と明神浜（旧伯方町）、南浦（旧吉海町）、引野（旧弓削町）の四ヶ所にあった事を考えると、四  
 国愛媛の  
 離島性も  
 伺えて興  
 味深く特  
 徴的な歴  
 史遺構と  
 言える。



その内部天井梁

さて、冒頭の平磯とつながるもう一方の九州側については、情報が乏しく調査も行き届かなかったが、昨年の9月にひよんなことで見つかった。所用があり、大分県佐賀関に上陸の後、この地では愛媛街道と呼ばれるR197号を走る車窓から、ウン？気になる建物の姿が偶然目の端に引掛かり、行き過ぎて停車した。それはこれまでも何度かこの道は通っていたものの、直感もあり、たまたま人影もあったため何やら気になって声をかけてみた。ドストライクであった。案の定、そのまだ比較的若そうなお方は昔の電話局の何かだと聞いています、



大志生木(おおじゅうぎ)水底線陸揚げ室

に撤去された県内他事例も踏まえつつ、こうした歴史遺産の時代継承をこそ、一人一人に有線電話で伝えた気がする。

とのこと。父なら詳しく分かるかも知れないとのこと。有り難くも突然の闖入者をつないでくれた。その東隣に居住するS氏（昭和19年生まれ）の話によれば、戦後昭和30年代に当時の電電公社から払い下げを受け、倉庫に使用していたとのこと。こうしてタマサカな出来事があり、豊後水道を遠く隔てた愛媛と大分間の電話ケーブル敷設の近代史が、眼前に浮かび上がったのだ。同じ陸屋根のコンクリート構造物だが、平磯の建物と違って、こちらはまだ文化財にはなっておらず、こうして当時の聞き取りをされたのも初めてだという。

何れにしても、近代の文明文化が地方にあまねく浸透し、現代社会につながるその狭間で、こうした近代化の遺産群が形状を劣化させている現実があり、既



大志生木水底線陸揚げ室